

第1回家庭教育支援指導者等研修 実施レポート

日時：令和3年7月15日（木）10時～12時10分 参加者：97名（うち市町村等から78名）
会場：秋田県生涯学習センター講堂及びYouTube 限定公開配信の受信可能な場所

今年度最初となる本研修では、受講方法を選択制にしました。会場で講話を聞く方法と、後日 YouTube 限定公開を視聴する方法です。「保護者の気持ちを理解し、地域でチームで支えよう」というテーマのもと、“ひきのばされた青年期”等についてや、家庭教育支援の基本的態度及び支援体制等を学びました。

【午前の部 講話】

秋田大学大学院心理教育実践コース教授の**北島 正人**氏は、「“ひきのばされた青年期”から考える保護者援助」と題し、講話されました。まず、E.H. エリクソンのライフサイクルについて事例を挙げながら説明。青年期は、身体的にも精神的にも、著しい発達を遂げる時期でありながらも不安定な時期。相違点に敏感なため、対人関係や能力の位置付けをすることで、自分ができることとできないことをはっきりさせていきます。この比較を繰り返し、「自分はこういう人間だ」とアイデンティティが分かるようになると、青年期に身に付けることとして成功とのこと。次に“ひきのばされた青年期”について話が移りました。高学歴化により、一人前になってからでないと社会が受け入れない状況と、「父性」的な社会機能の低下により、おとなが“悪役”を取らない状況という矛盾する社会的事情が、40年前から続いています。そこで大切なことは「他者からの承認」で、若い人は他者から「いいね」をもらわないと判断しにくいそうです。社会的ひきこもりや不登校の事例からもその重要性がうかがえました。ひきのばされた現状において、親と子への批判や否定は役に立たないことで、支援者は親に具体的な段階的自立をアドバイスすることが重要だと強調され、話を結びました。



【午後の部 講話】

秋田県生涯学習センター社会教育主事の**菊地 智**が「家庭教育調査からみえる家庭教育支援チームの役割」と題して話をしました。家庭教育調査の結果や新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査結果のデータに基づいて、地域の力で家庭を支える家庭教育支援チームが今こそ必要とされていることを説明しました。また、各市町村での取組を紹介しながら、チームに期待される役割や支援体制、効果や方策等、支援のベースとなる事項について話しました。結びに、コロナ禍をはじめとする社会の変化に対応するためには、家庭教育支援チームの強みを生かし、「保護者が地域とかかわれる機会を保障すること」「保護者が利用しやすいつながりや手段から探ること」をヒントに活動してほしいと伝えました。家庭教育支援チームリーダー・サポーターには、子育てする人が地域の支えの重要性を感じ取り、気づいていけるように、長い目でかかわってほしいと願っています。



【参加者アンケートより】（抜粋）

- ・発達段階で成功と失敗を繰り返し私たちは成長していること、失敗した経験を乗り越えるための声のかけ方のアドバイスが講話の中にちりばめられ、とても参考になった。
- ・「キャッチする」「きく」「つなぐ」支援をできるよう『場』づくりの必要性を感じている。今後、オンライン・動画等も考えるときなのかもしれないと思った。

【参加者研修レポートより】（抜粋）

- ・講話の中で「地域の方々と連携することで『チームワーク』『ネットワーク』『フットワーク』を駆使した支援が可能」との話があった。まさに、当市にある2団体と連携することで、それが可能になると考えている。思うような活動ができない状況下ではあるが、社会の変化に応じた支援を自分たちで考え、臨機応変に対応できるこの2つの団体と定期的に打合せを行い、彼らの新たな発想を尊重し、必要があれば、専門の福祉部局や先生方とつなぐなどの支援を行っていききたい。